

小学校英語における文字導入のすすめ - -

電子教材が切り開く可能性

Introducing Reading and Writing to Elementary Students –
By Use of Computer Software

田淵 龍二 (ミント音声教育研究所)

Mike CANEVARI (MY English)

キーワード： 音声重視、義音字一体、電子黒板、電子授業、識字教育

1 はじめに

小学校における英語教育が本格的に開始される時代となった。しかし現場にはさまざまな問題が発生している。教材と教授法を求めて多くの学校が右往左往している。文科省が電子教育に力点をおく政策に移行しつつも、それが電子黒板と言うハード(ある種の箱物)に偏りを持っていることが混乱に輪を掛ける可能性も高くなっている。今回の実践研究では、識字教育という観点から児童英語・小学校英語における電子授業を捕らえ返す。

1.1 「文字の導入が英語嫌いを増やす」という迷信

英語が必修化される小学校の現場では、「文字の導入が英語嫌いを増やす」という迷信が幅を利かせ、熱心な教員に無用な圧力となっている。

資料1) 小学校英語活動研修講座(文科省初等中等教育局河野浩専門官)より

- ・ 英語活動の配慮事項：英語嫌いはつくりたくない、文字を使わない

資料2) 2001年(平成13年)文科省「小学校英語活動実践の手引き」より

- ・ 英語の文字と音声を同時に媒体として意思の伝達を図ろうとすることは、小学校の子どもにとっては負担が大き過ぎて、英語嫌いを生み出すことにつながる。

1.2 文字の導入を目指す取り組み

他方では「文字導入 英語嫌いが増える」という迷信を打ち破る取り組みも進んでいる。

資料3) 「小学校英語活動の在り方についての調査研究」(福島県 黒須智則)より

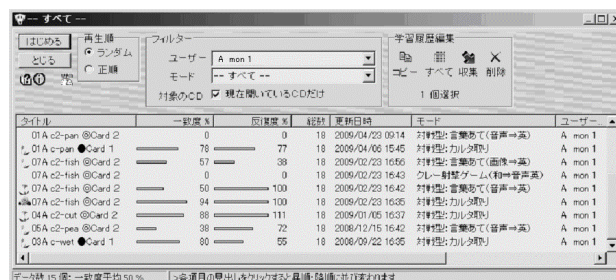
- ・ 中学校での「読むこと」「書くこと」へのモチベーションを高める小学校英語活動におけるフォニックス指導の在り方を研究する。

資料4) 「小学校英語カリキュラム試案の開発研究主題 - 音声と文字のつながりに着目して - 」(港区立筭小学校教諭高橋美香)より

- ・ 文字には記憶保持、音声把握、情報取得等に効果があるといわれている。そこで音声と文字のつながりを発達段階に即して指導に取り入れることで、実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことができると考えた。

2. 取り組み

報告者達は2007年秋からフォニックスライムによる音声重視の識字教育（年長児と小学生）を始め、翌年4月からはプリントによる読み書き練習（小3以上）も加えた。2009年4月からは教材ソフト（プレーヤーソフト）の履歴機能を活用し、すべてのクラスで正誤記録保存を始めた。



学習ID	一読数%	再読数%	統計	更新日時	モード	ユーザー
01A c2-pan @Card 2	0	0	18	2009/04/23 09:14	対峙型:音響あて(音声→英)	A mon 1
01A c2-pan @Card 1	78	77	18	2009/04/02 15:45	対峙型:カルシク読	A mon 1
07A c2-fish @Card 2	57	38	18	2009/02/23 16:56	対峙型:音響あて(画像→英)	A mon 1
07A c2-fish @Card 2	0	0	18	2009/02/23 16:43	クレー射撃ゲーム(動→音声英)	A mon 1
07A c2-fish @Card 2	50	100	18	2009/02/23 16:42	対峙型:音響あて(音声→英)	A mon 1
07A c2-fish @Card 2	94	100	18	2009/02/23 16:35	対峙型:カルシク読	A mon 1
04A c2-cut @Card 2	88	111	18	2009/01/05 16:37	対峙型:カルシク読	A mon 1
05A c2-see @Card 2	98	72	18	2009/02/15 16:42	対峙型:音響あて(音声→英)	A mon 1
03A c2-wet @Card 1	80	55	18	2009/09/22 16:05	対峙型:カルシク読	A mon 1

クラス別学習履歴

2.1 対象：年長児と小学生

小学生約100人（週1回20分前後）、年長児約300人（隔週10分前後）

2.1 目的：知的欲求に応える

10歳前後から急速に高まる文字に対する知的欲求に応え、識字教育になめらかに進む。

2.2 配慮事項：音と意味から入る識字教育

音声重視：発音とリズムとイントネーションの習得を識字教育の基礎に置く

対立概念：漢文訓読のような読解英語、カタカナ英語、アブク読み

義音字一体：意味と音と字の3者を切り離さない授業を実施する

対立概念：小学校では文字を扱わない、文字が英語嫌いを増やす

先音後字：文字の学習指導は、音声と意味の理解の後にする

対立概念：音とリズム（と意味）が入らない和式フォニックス

2.3 授業で利用した提示と演習

提示法：フラッシュカードで字を順次大きくする提示、単語を綴り分解する提示、音声連動

朗読位置強調表示、テキストが順に現れるフレーズ提示など

演習モード：かるた取り、言葉あて（音声 英）、ディクテーション（母音虫食い）など

紙ベースドリル：フォニックスライムブック

3. 結果と考察

「文字の導入が英語嫌いを増やす」から字は使わないという対処では、かえって子どもたちのやる気をそぐこととなる。ソリューションは「電子授業の特性を活かした授業方法」である。今回はそれを3年間の実践経験と、3ヶ月間のデータで示す。